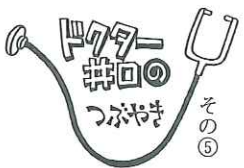


あじくすげ 6月号 (東海志にせの会)



いよいよ始まったか？

井口昭久

患者に検査の結果を説明した後「あなたは当分死にはないですよ」と言うことがある。当分死なないだろうという言葉に嘘はない。自分が長いか、短いかの違いはあるが、誰だって当分は死なない。言われた患者は嬉しそうな顔になる。

こういうことは付き合ひの短い患者には言えない。

患者と医者との関係は、お互いに相手がどのような人物であるか疑心暗鬼の状態から始まる。服装や振る舞いや皮膚の状態などから社会的地位や人格などを読み取っている。今日

は何を言っても怒らないだろうと、お互いの状態が分かるようになるには時間がかかる。何でも言い合えるようになってくる程にお付き合ひが長くなる頃には、患者も私も年老いてくる。中には認知症になる人も出てきている。

「病識」という言葉がある。精神的な病氣を持つ者が、自分が病氣であることを自覚するという意味である。他者からみれば明らかに病氣と思えるのだが、本人は病氣だと思っていない場合「病識がない」と言う。

風邪や腹痛などの肉体に関わる病氣は障害

を負っているとは自覚できるが、精神や知能に関わる病氣は自覚するのは難しい。病氣を認めることは、自分を否定することに繋がると思ってしまうからである。自分の脳で自分の脳を客観的にみることは病氣でなくても難題である。

認知症の疑いのある人で、病識のない人に、認知症に関連した質問をするのは躊躇する。認知症の診断には「今、日本で起こっている大ニュースは何ですか?」「今日は何月何日ですか?」などと患者に質問するのだが、糖尿病で私の所へ通っている患者に「100引く7はいくつですか?」と問いたただすのは勇氣がいる。

私も突然今日は何月何日ですか、と問われても正確に答える自信はない。今年は何年ですかと聞かれると、去年か今年か分からなくなる。

その日は2011年4月1日だった。震災から20日経っていた。朝、テレビは震災の悲

惨な状況を映し出していた。まだ肌寒かった。病院に向かう車で聞くラジオのニュースに涙が出た。

朝9時、病院の外來で最初に診た患者が突然、私に言った。「先生ひとこと言わせて下さい」

その患者は60歳代の後半で糖尿病の患者であった。

私は緊張した。

「先生、セーターの前と後ろが逆になっています」

私がセーターを首つり状態で着ていたのを注意してくれたのだった。

そして患者は付け加えた。

「先生もいよいよ始まったかな?と



井口昭久 1943年長野県生まれ。名古屋大学医学部卒業後、同第三内科入局。愛知医科大学講師などを経て'78年ニューヨーク医科大学留学。'93年名古屋大学医学部老年科教授。名古屋大学医学部附属病院長を経て現在、愛知淑徳大学教授、名古屋大学名誉教授。【鈍行列車に乗って—医者人生ソロソロ帰り道】(風媒社)など著書多数。